

二代目市川團十郎日記詳解 — 享保十八年十二月〜十九年一月 —

ビュールク トーヴェ\*

はじめに

享保期江戸歌舞伎の中心的人物である二代目市川團十郎（元禄元（一六八八）年〜宝暦八（一七五八）年）は、「暫」や「鳴神」、「助六」などの演技演出を創作し、完成した。この時期は歌舞伎が熟成していくが、資料は極めて少なく、不明な点が多い。二代目團十郎が書き残した日記はこの時期の貴重な資料だが、分析・研究が進んでいない。

日記原本は文化初期、狂歌師狂歌堂真顔に貸与中焼失したが、幸い享保十八（一七三三）年十二月から寛延三（一七五〇）年九月までの写本五種類が残された。これら写本の経緯については赤間亮著「二代目市川團十郎の日記諸本考」（『藝能文化史』六号、一九八四年）などに詳しいが、日記への注釈や解説は一部しか進んでおらず、未詳の部分が大きい。そこで二代目團十郎の日記の全面的な解釈を試みる。

写本について

写本には「老のたのしみ抄」(▽)、「柿表紙」(○)、「栢筵日記」(●)、「病中日記」(△)、「市川團十郎日記発句集」(▼)の五種類がある。「老のたのしみ抄」は、五代目團十郎が享和二（一八〇二）年九月、

\*ビュールク トーヴェ

埼玉大学大学院 人文社会科学研究所 准教授、日本近世文学、演劇（歌舞伎）

早逝した息子六代目團十郎の追善として孫の玉木屋次郎（和泉屋おすみの子、後の七代目團十郎かその兄弟であるかは未詳）に日記写本を贈るため、山東京伝にその制作を依頼したもので、京伝の注がある。これを元に国立国会図書館本（『中古叢書』所収本、文化元（一八〇四）

年写）、刈谷図書館村上文庫本（文化五（一八〇八）年写／嘉永四（一八五二）年写）、早稲田大学演劇博物館本（天保十四（一八四三）年写）、天理図書館蔵（木村黙老著『続聞まゝ記』所収）が作られ、さらに、山東京伝の弟山東京山の朱書入り柿衛文庫蔵本（文政十三（一八三〇）年）などもある。

「柿表紙」は、享和二（一八〇二）年夏、狂歌堂真顔の主治医であった弄月亭金花が一日だけ真顔より日記をまた借りし、息子と二人で写し取ったものである。享保十九（一七三四）年正月から十月までの記述を収録する。「栢筵日記」（写者不明）は享保二十（一七三五）年正月から四月まで、および宝暦五（一七五五）年から八年までの句日記であり、これらの資料は一九一七年、伊原青々園筆注による写本『栢筵遺筆集』にまとめられ、早稲田大学演劇博物館に現存する。黒須広吉氏蔵の原本はいずれも一九二三年の関東大地震の際に失われたとされているが、二〇一五年、「栢筵日記」は早稲田大学演劇博物館の新出資料から発見された。

享保二十年七月から年末にかけて大病を患った二代目団十郎はその療養中、友人で中村座の木戸番とされる里卿（里郷）とも宛てに「病中日記」を送った。ここには病氣回復のための祈りや、慰めに詠んだ狂歌などが収録されている。これも原本は存在しないが、木村黙老の随筆『聞まゝ記』（天保初期、神宮文庫本など）に収録された。さらに文化二（一八〇五）年、俳人緑亭沾玉が日記から俳句千二百句を抜き書した「市川団十郎日記発句集」（洒竹文庫蔵）にも収録されている。

これらの写本はいずれも翻刻され『資料集成二世市川団十郎』（和泉書院、一九八八年）に日付順に収録されている。同書では底本を区別するために記号▽○●△▼を用いており、本稿でもこれに従う。

本稿では享保十八年十二月から翌年一月までの記録について注釈を付して解説する。これ以降については以後、順次詳解する。

### 注釈書一覧

日記写本の注釈書には以下のものがある。へはそれぞれの略号。  
「老のたのしみ抄」

〈岩〉岩本活東子編「老のたのしみ抄」『燕石十種』文久元（一八六一）年編、市島謙吉活字編、一九〇六年（新版中央口論社、一九八〇年刊）  
〈内〉内藤耻叟・小宮山綏介編「老の楽」『温知叢書』博文館蔵、一八九一年刊）

〈博〉博文館編輯局編「老の楽」『校訂俳優全集』博文館、一九〇一年刊）

〈郡〉郡司正勝編「老のたのしみ抄」『近世芸道論』日本思想体系（六一）岩波書店、一九七二年刊）

「柿表紙」

〈伊柿〉伊原青々園編「柿表紙」『栢蒔遺筆集』一九一七年写、早稲田大学演劇博物館蔵）

「栢蒔日記」

〈伊栢〉伊原青々園編「栢蒔日記」『栢蒔遺筆集』一九一七年写、早稲田大学演劇博物館蔵）

### 凡例

- 一、記号▽○●△▼は原本を示す。
- 二、注釈書からの引用は、書名をへで示し、引用文を「」で示した。
- 三、「」のない注釈は筆者による。
- 四、日記本文中の数字は注の番号を示す。
- 五、引用文の約物は省略した。
- 六、出典の記載がない役者評判記は『歌舞伎評判記集成』（岩波書店、一九七二年〜一九七七年刊）から引用した。

### 享保十八年十二月

#### 【日記】

○享保十八年（一） 丑年歳暮前書アリ

アカルサヨ（二） 大ツコモリノ鞍馬山 才牛（三）

#### 【注】

（一） 享保十八年

〔伊柿〕「本年十月、中村勘三郎座の手附金受取証」長谷川町善右衛門店市川団十郎とあり」

この注は以下に示す関根只誠纂録『東都劇場沿革誌料』

(一七) 歌舞伎資料選書6、国立劇場芸能調査室、一九八三年刊)収録の契約書を元としている。

只誠云、予が所蔵之内二代目団十郎之証書、並二代目関三十郎之証文の写、右に記す、

手付金受取証文の事

一 私等儀当丑年十一月より来寅年十月興行迄一ヶ年貴殿御芝居へ御抱に相成候給金七百兩と相定め、今日内金百五十兩慥に受取申候所実正也、然上は外芝居は勿論、他国等へ罷出家業仕間敷、為後日手付証文仍如件、

享保十八丑年十月廿五日 長谷川町 善右衛門店

市川団十郎

小伝馬町二丁目 家主

身元受人 清 助

中村勘三郎殿

アカルサヨ

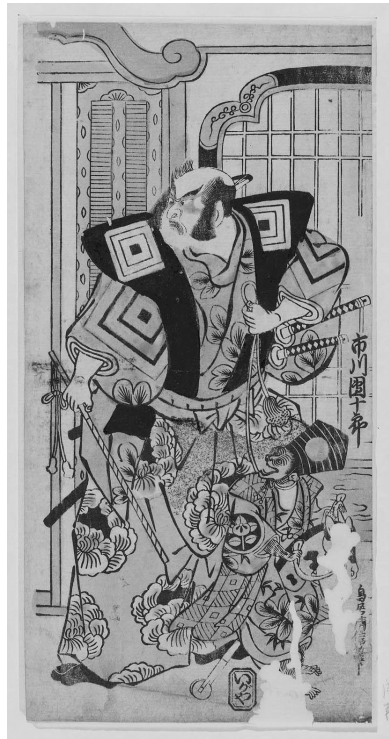
〔伊柿〕「この時市村座出勤也」

才牛

〔伊柿〕「父の俳名を襲ぎし也、後に栢筵と改む」

享保十五(一七三〇)年までは「三升」、享保二十年以降は「栢筵」。「才牛」はその間の五年間のみ利用(楠元六男著『享保期江戸俳諧攷』新典社研究叢書(62)、新典社、一九九三年)。

(図1) 二代目鳥居清信筆「篠塚五郎(市川団十郎)、猿(市村万蔵)」享保十八年十一月、ボストン美術館蔵



【解説】

歳暮を祝う句。関根只誠旧蔵の契約書は享保十九年、中村勘三郎座との間でやりとりされたもの(伊柿)だが、二代目団十郎はこの年、市村座に勤めていたことが同年の役者評判記や番附などから知られており、二代目団十郎は中村座と交渉を行ったが不首尾に終わり、結局市村座への出演を決めたことを示す。中村座が年俸七百兩を提示しているため、市村座の出演料はそれ以上であったことも考えられる。

本契約書は二代目団十郎の住居を長谷川町とする。長谷川町は現・中央区日本橋堀留町二丁目近辺、堺町(中村座)や葺屋町(市村座)にも近かった。また、三光稻荷神社や人形屋竹岡豊前、浮世絵師古山太郎兵衛師重、版元や彫り師ら職人の住まい、乗物屋や古着屋、布屋など商店などもあった(『江戸図鑑綱目』元禄二(一六八九)年刊、国

会図書館蔵、『江戸惣鹿子名所大全』元禄三年刊、『江戸砂子』享保十七年刊など。しかし、長谷川町の西側には人形町通りがあり、享保期末の二代目団十郎の屋敷について「其頃人形町に間口十間の千両屋敷を所持せり 左助といへるものに大家役を頼置しか 右之大病に諸社

【注】

(1)

〔寅年〕

〔博〕「栢筵四十七歳」

諸寺<sup>江</sup>命乞の願やら望月三英老の療治にて朝鮮人參は牛房大根のことに用ひ 諸事日夜の物入等にて右人形町屋敷を江市屋惣助方へ譲り

(2)

〔庭訓や〕

〔郡〕「京伝の朱注に『栢筵此年四十七歳』とある。市村座出勤」

けり」(池須賀散人著『市川栢筵舎事録』明和六(二七六九)年写『資料集成二世市川団十郎』収録)とあることから、団十郎家は人形町通りの長谷川町側であったか。

(3)

〔恵方〕

〔郡〕「家庭の教えによれば」

二代目団十郎は年末のある日から出勤した(伊柿)。市村座の顔見世狂言は「正本太平記」(十一月五月初日)で「しの塚いがの守のお役例のごとく橋がよりより、すり立<sup>テ</sup>に鎌髻、上下を着し、まつかいて顔をぬり、満蔵殿を猿に仕立<sup>テ</sup>」(二ばんめ楠判官役、ゑぼし大紋にて、子息正行に、太平記の素読の指南みなど川の絵姿、度々の事ながら、取わけ大出来〜)『役者三津物』享保十九年正月刊)などと成功したが、興行が十二月末まで続いたかどうかは不明。このとき、二代目団十郎は篠塚伊賀守と楠正成二役を演じ、座元市村羽右衛門の息子萬蔵とともに猿回しの芸も見せた(図1)。

(4)

〔蜈蚣〕

〔郡〕「百足は毘沙門天の使として、正月の初寅に祝う。あし(銭)が多いという縁語。『向う』と『むかで』とかけた」

(5)

〔才牛〕

〔岩〕「二代目栢筵、父の名を継いで才牛斎とも号せり」

〔内〕「活東子云元祖団十郎は才麿の門人俳諧の名を才牛と云、二代目団十郎是つぎて才牛と称す後二栢筵と改む享保十九年寅年四十七歳なり」

〔郡〕「京伝の朱注に『元祖団十郎、才麿ノ門人ニテ俳諧ノ名ヲ才牛ト云、二代目団十郎コレヲツギテ才牛ト称ス、後二栢筵ト更ム』」

享保十九年一月

【日記】

▽寅年(1) 歳旦元日寅の日也

庭訓や(2) 恵方(3) に蜈蚣(4) 先ついはひ

才牛(5)

〔図2〕『享保十九甲寅年春狂言本』収録「祐成飾大磯寅年」ポストン美術館蔵



【解説】

歳旦を祝う句。市村座正月興行「七種繁會我」（ななくさにぎわいそが）の絵尽くし（図2）には「祐成飾大磯寅年（すけなりがかざりハおゝいそのとらのとし）、このほうにむかつてよめとりよし、時宗恵方粧坂正月（ときむねがゑほうハけわいざかのしようくきち）、此のほうに向て馬のりぞめよし」とあり、二代目団十郎の元旦の句と同様「恵方」、「むかう」が取りあげられている。二代目団十郎の句は、このとき演じていた曾我五郎にもかけているか。

【日記】

○六日ノ朝夢想

松ノ内ニマダ元朝や齋売（1）

【注】

（1）齋売

なすなうり。陰曆正月七日の七種粥に用いる齋をその前日に売り歩く人（『日本国語大辞典』用例・沾徳編『俳林一字幽蘭集』（元禄五年刊））。

【解説】

元旦の朝に齋売りが登場する夢を正月六日に見たという発句。七種粥に用いる齋を販売する齋売りは、「七種繁會我」にかける。

【日記】

▽目黒（1）より梅の花をもらひて

田境の垣こそなけれ一重梅 才牛

母人（2）きけんよく江戸にて（3）年御取被成 大晦日此方へ御出にて 元日翁渡し（4）見物 嵐三右衛門（5）見物へ始て目見へ（6）我等引合 三右衛門口上 先年祖父三右衛門（7）御当地へ罷下り候時は西崎三右衛門と申候 其頃丹前（8）と申事御座候 夫れを六法（9）と致候て其六法の内に花に嵐と申せりふ人く様の御氣に入候て ちひ三右衛門町を通り候時は やれ嵐か通るいよあらし／＼と御はうひに預り候故 夫より直に苗字をあらため嵐三右衛門と申候 三代迄座元仕候もお江戸町中様よりあらしと申苗字もらひ（10）候故と難有奉存候 御名染の団十郎殿同前に御ひいきを頼上候 舞台の役義（11）は十郎五郎（12）て御さりますれとも内証はあちらか念者（13）分てこさりまする 団十郎真実の弟しや

と思召御ひいきを頼上まする

【注】

(1) 目黒

〈伊柿〉「栢庭が目黒の隱宅につき、『論語魁』<sup>二</sup>母の名を成、法名栄光、目黒山人坂へ隱居させ朱林庵といふ別荘を建、田地付小遣として一ヶ年百兩づゝ遣しと也」(○●の序)

「論語魁」とは演劇書『古今役者論語魁』(近仁齋薪翁著、明和九(一七七二)年刊)のことであろうが、同書中にこの記述は見当たらない。

(2) 母人

〈内〉「活東子が」又云、栢庭母に仕へて孝なるを見るべし母は元祖団十郎妻なり法名栄光」

〈博〉「元祖団十郎妻法名栄光」

(3) 江戸にて

〈郡〉「目黒の別荘から、江戸の本宅に来ての意」

(4) 翁渡し

〈郡〉「江戸の劇場にて元日より三日間演ずる翁式をいう」能楽曲の「翁」を歌舞伎風に演じ、顔見世では太夫元が翁、若太夫が千歳、座頭または振付師が三番叟となり、別火精進して初日から三日まで朝の演目として勤めた。天下泰平、五穀豊穰、芝居繁盛を祈願する心であった(『歌舞伎事典』)。享保十九年、二代目団十郎は市村座の座頭、翁渡ししの三番叟を勤めたか。

(5)

嵐三右衛門  
〈郡〉「三代」

三代目嵐三右衛門のこと。元禄十(一六九七)年、宝暦四(一七五四)年、二代目の実子。立役。俳名番虎。宝永元(一七〇四)年八歳で襲名、以後二十二年間、大坂で座元を勤む。延享二(一七四五)年、嵐新平と改名、和事・六方を得意とした(『歌舞伎事典』)。

(6)

始て目見

「お江戸へ初てのお下り、難波の梅の粹の芸見んと、夜明から木戸つまつて大入成しに、御病氣ゆへ顔みせお休正月二日より六日迄座着計<sup>二</sup>出」(『享保十九年江戸・大坂評判記』)〈享保十九年三月刊〉嵐三右衛門評。

一月二日から六日まで挨拶の口上のみ、七日から出演した。

(7)

祖父三右衛門

〈郡〉「初代」

初代嵐三右衛門のこと。寛永十二(一六三五)年、元禄三(一六九〇)年、立役。丸小三右衛門と称して舞台を踏み、寛文頃「小夜嵐」という狂言で当たりをとって嵐と改姓。延宝二(一六七四)年または三年に上京、以後京坂で座元を勤めた。六方・やつし事を得意とし、やつしを主流とする元禄の上方歌舞伎の基礎を作った(『歌舞伎事典』)。

(8)

丹前

〈郡〉「一種の歩く芸。江戸で丹前といったのを上方で六法とした。寛文年間『小夜嵐』という狂言で勤めた」

(9)

〔六法〕

〔郡〕右同。

(10)

お江戸町中様よりあらしと申苗字もらひ

初代・二代目・三代目嵐三右衛門が享保十九年以前に江戸に下る記録はない。

(11)

〔役義〕

〔伊柿〕「役儀仕」

(12)

〔十郎五郎〕

〔郡〕「曾我兄弟。市村座の『七草若陽曾我』で、十郎は三右衛門、五郎は団十郎が勤めたのをさす」

題目名は「七種繁曾我」(『享保十九年江戸・大坂評判記』

『芝居紋番付』(国会図書館)など)。

(13)

〔念者〕

〔郡〕「兄分の意。衆道の語をわざと用いている。高安本『兄分』

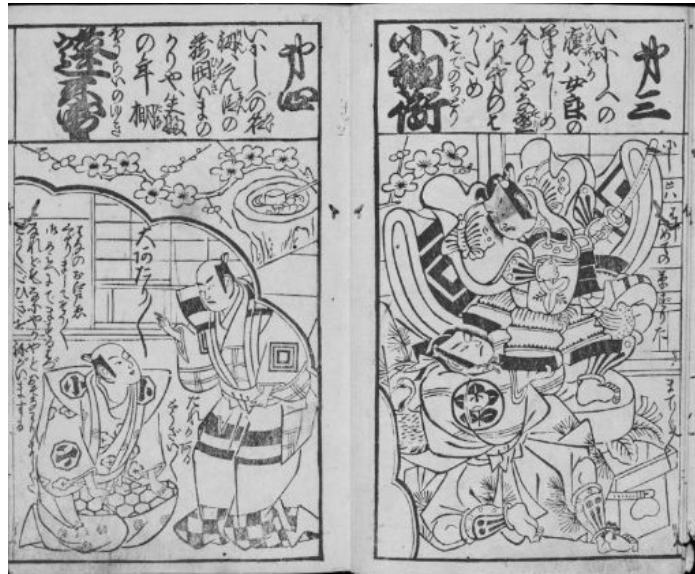
〔伊柿〕、写本・国会図書館本、刈谷図書館本、柿衛文庫本

は「念者分」、〔岩〕〔内〕〔博〕は「兄貴分」とする。こうし

た変更は歌舞伎の男色売春と関わるためか。

(図3) 『享保十九甲寅年春狂言本』収録「第三・第四」ポストン美術館蔵

館蔵



【解説】

二代目団十郎の母お戌が目黒の別荘から江戸の屋敷(人形町または長谷川町か、享保十八年十二月・注1、解説参照)を訪れ、市村座の新年の祝い演目「翁渡し」を観劇したことに触れている。このとき二代目団十郎は三番叟を勤めた。この句は母が江戸に来ていることを喜

んだもの。「栄光とて親団十郎才牛の妻にて海老蔵母なり 気性甚活にして皆人敬ふ事神か仏のことし 仁心深き生れにて家内の者はいふに及はず 出入のものまでもあはれみ深く風に草のなひくかことし 尊敬する事也 海老蔵至つて母へ孝を尽し芝居<sup>江</sup>役義に出る時は母の前に手つき礼義をのへ又仏間に入りて親才牛の位牌にむかひ拝礼なして出ぬ」『市川栢蓑舎事録』とするように、二代目団十郎にとつて母の存在感絶大なものだった。お成は寛文二(一六六二)年頃生、寛延三(一七五〇)年没。

日記後半には三代目嵐三右衛門の口上を書き留めた。「七種繁會我」に出演した嵐三右衛門に関する記録はいくつか残っている。「七日より七種繁會我<sup>二</sup>十郎と成出給ふ。一番目<sup>二</sup>団十郎殿長上下<sup>二</sup>て先へ出。太郎くはじやと。よび出されて出られ。顔みせ出ざる段々の口上よし」(『享保十九年江戸・大坂評判記』嵐三右衛門評)、「第三、いにしへの<sup>■</sup>いれほくろ)ハ女良の恋はじめ、今のふな盛(をり)ハ兄弟のはがため、小袖衛(こそでちどり)」(図3・第三)、「第四、いにしへの名剣(めいけん)ハくん臣(しん)の舞開(ひらき)いまのかりやハ夫婦の年棚(たな)、蓬萊雪(ほうらいのゆき)、はなのお江戸多くだりましてそうく御めみミへでまするはづなれどもなにやかやとおそなりました、とかくごひきをねがいまする」(図3・第四)とある。

初代嵐三右衛門は若いころ、江戸で「小夜嵐」で大当たりし、嵐姓を使うようになったというが、初代嵐三右衛門と江戸との関連は唯一「当月などは一羽に付或は十両或は五両ひよこさへ壹歩する道理かな親仁を子共にする妙薬じやまだ高ひ物があるは嵐が卵を江戸から百両につけさうなといふまつてみや」(『難波の貞は伊勢の白粉』天和三(一

六八三)年正月、初代嵐三右衛門・鈴木平左衛門・嵐門三郎(後に二代目嵐三右衛門)評)にみられるのみで、歴史的事実を基づいているかは未詳。

## 【日記】

▽六日より二番め(1)出三右衛門顔見世大入也 二三日評判よかりしに三右衛門声ひしとかれ夫よりそろく評判あしくとかくかる過下ひたなとくといろく評判也 是顔見世病氣にて不相勤人氣くしけたるゆへ歟

## 【注】

(1)

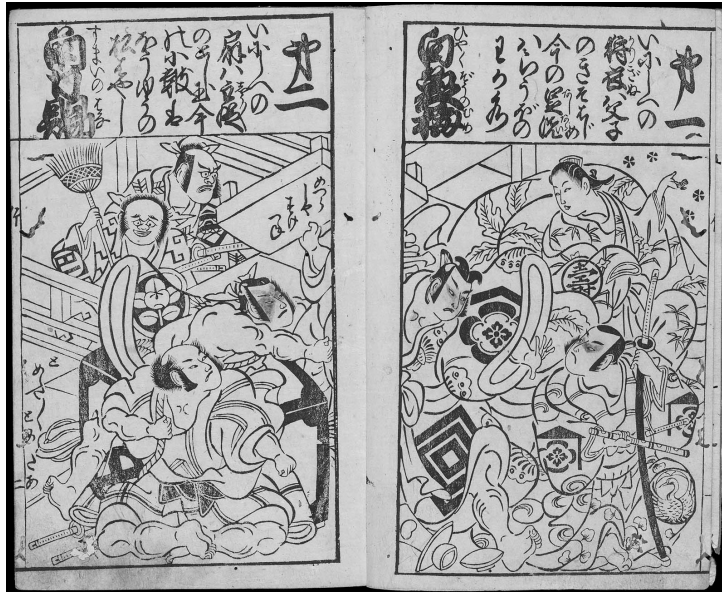
## 【一番め】

〈郡〉二番目世話狂言『隅田川五人男』。『役者初子読』に「嵐三右衛門出られぬ故とは云ながらムゴウ当らず」

五人男が登場する「繁扇隅田川」は三月十六日から上演された。「十一日二名題ヲ出ス スエヒロ隅田川 翌十二日 マネキ五人男ノカンバン出ス 評判大キニヨシ所ニカンバン出スト 三右衛門又病氣 散々ニテ十五日ノ初日十六日延引狂言立替へ 三右衛門替半五郎ニ直シ十六日ヨリ初日出ス」(三月十一日〇)。



〔図4〕『享保十九甲寅年春狂言本』収録「第一・第二」ポストン美術館蔵



とするが、朝比奈（八代目市村羽右衛門）に止められる。嵐三右衛門は太郎冠者を演じたが、それ以降の演技について「まさこの前とらを請出し、朝いなへ祝言と聞、御殿うろつかるゝ所へ、津打門三郎殿、十郎にせ来り案内の時、取次ニ出、十郎と聞、私は名は何と申と、仰天のけしきおかし」三代の名題男、諸芸の花下ニ置れぬ上野の桜」『享保十九年江戸・大坂評判記』としている。これに対して「七種繁曾我」については「去寅の春の曾我思はしからず」『役者初子読』享保二十年正月、団十郎評）もある。役者評判記は当時、興業の二ヶ月から一年後に出版されたので、二代目団十郎がいう「いろく評判也」は当時の世間の風評を指している。

【日記】

▽廿四日 京沢村長十郎（1）病死年六十余歟 戒名貞誉宗慶 宝永六年十一月朔日 坂田藤十郎（2）病死 戒名天蓮社十誉一空 長十郎戒名の序に兵四郎（3）に聞書付く

【注】

（1） 沢村長十郎

〈郡〉「初代」

延宝三（一六七五）年〜享保十九（一七三四）年。通称は備中屋長右衛門。俳名は宗慶。屋号は井筒屋。囃子方から立役となり、京都・大坂で座元をつとめた。一時、沢村宗十郎を名のる。能楽、茶道、俳諧など諸芸に通じていた『日本人名事典』。

【解説】

「七種繁曾我」の二番目は「角力賜（すまいのはな）」と呼ばれ（図4）、『曾我物語』の一場面として有名な「和田の酒盛り」を元にしたもの。曾我五郎（二代目団十郎）は工藤祐経（坂東彦三郎）を討とう

## (2)

## 坂田藤十郎

〈郡〉「初代」

正保四(一六四七)年、宝永六(一七〇九)年。京の都万  
 太夫座四天王の一人とされ、大坂で演じた「夕霧名残の正月」  
 の伊左衛門はその名声を高めた。元禄六(一六九三)年頃か  
 ら近松門左衛門の作を多く演じた。傾城買狂言を形成するや  
 つし事・濡れ事・くぜつ事などを最も得意とし、特に長ぜり  
 ふの仕方咄に巧みであった(『歌舞伎事典』)。

## (3)

## 兵四郎

〈郡〉「坂田兵四郎。小唄の名手。藤十郎の妹婿の子。江戸へ  
 下る」

元禄十五(一七〇二)年、寛延二(一七四九)年。初代坂  
 田藤十郎の甥。坂田派の流祖。享保十五(一七三〇)年、初  
 代瀬川菊之丞とともに京都から江戸にうつり、翌年中村座で  
 「無間の鐘」をうたい好評を博す(『日本人名事典』)。

## 【解説】

二代目団十郎はしばしば歌舞伎関係者や俳人、友人や知り合いの没  
 日を記した。日記以外にも初代団十郎の二十七回忌のために俳諧集  
 『父の恩』(享保十五年刊、英一蜂・小川破笠画)を編むなど、「追善」  
 に強い関心を示した。同書は役者句集として最も古く、初代団十郎だ  
 けでなく、彼の没後から享保十四(一七二九)年まで二十六年間に亡  
 くなった江戸歌舞伎の役者六十五人の追善発句や戒名などが記され  
 た。

日記に登場する坂田兵四郎は享保十六(一七三二)年正月、女形役  
 者瀬川菊之丞が中村座「けいせい福引名古屋」で演じた「無間の鐘」  
 の所作事の楽曲を作曲した(「けいせい道成寺」、日本名著全集『歌謡  
 音曲集』など収録)。二代目団十郎はこの演目で扇売りにやつす不破

伴左衛門を演じ、興行は大当たりした。その姿は「年玉扇売り」(ボ  
 ストン美術館蔵)で見ることができ、せりふ正本も残されている(抱  
 谷文庫蔵)。坂田兵四郎は同年八月二十五日、二代目団十郎から歴史  
 書『吾妻鏡』を借りるなど(○)、二人には親しい関係があった。

## 【日記】

▽廿七日 両国はしひしや小右衛門(1)方へ松浦御隠居様(2)御入  
 被遊 何江(3)予行一漁(4)に出合過し十一日には大黒や(5)  
 へ御出被成 予酒気故足をくちき足駄ふみかへしき 一笑

## 【注】

## (1)

## 両国はしひしや小右衛門

△は「小右衛門」としているが、「菱屋小左衛門」(伊柿)  
 や「両国橋向本所一ツ目近所茶屋町に、寄合料理茶屋にて、  
 菱屋小左衛門といふ者あり。彼が父は常憲院様御代出頭た  
 りし柳澤甲斐守へ気に入り、定紋花菱の小袖上下をゆるされ、  
 其家名をも夫より菱屋と名乗りけり」(馬場文耕著『武野俗談』  
 卷之九「菱屋おりつが殿」、宝暦六(一七五六)年序『有朋  
 堂文庫』第八六卷所収、一九一五年)がある。

常憲院とは五代將軍徳川綱吉のこと、柳澤甲斐守とは元禄期の大老格柳沢吉保のこと。

(2)

**松浦御隠居様**

〔郡〕「平戸の松浦侯。松浦篤信。享保十二年隠居。宝暦六年没」

六代目平戸藩主、貞享四（一六八七）年〜宝暦六（一七五六）年。浅草で生まれ、正徳三（一七二三）年より平戸藩藩主を勤めた。享保十二（一七二七）年、病氣を理由に退職し、隠居の身でさまざまに興味を嗜んでいた。子どもは十九人（男子十一人、女子八人）、孫に後に活躍する経済・政治学者松浦静山がいる（『寛政重修諸家譜』）。

(3)

**何江**

〔内〕「何江は市村羽左工門にて寛延より宝暦の末まで大夫となりしよし」

〔博〕「何江（市村羽左衛門）」

〔郡〕「京伝注『何江ハ市村羽左衛門事、則坐元也』。八代市村羽左衛門」

四代目市村竹之丞。元禄十一（一六九八）年〜宝暦十二（一七六二）年。七代市村宇左衛門の弟。元禄十六（一七〇三）年、江戸市村座の座元六代を継ぐ。子役で舞台に出、元文二（一七三六）年、八代宇左衛門を襲名。寛延元（一七四四）年羽左衛門と改名。若衆方、女方、立役、さらに敵役まで、ひろい芸域をこなした。俳名は河江、橋中庵。屋号は菊屋（『日本人名事典』）。

(4)

**一漁**

〔郡〕「料亭か」

俳人初代または二代目鶴海一漁のこと。初代は通称嘉平治。別号に釣月堂。江戸浅草蔵前に住み、享保八（一七二三）年『俳諧二むかし』を編む。初代は享保二十年死去。二代目は生没年未詳。初代鶴海一漁の子。享保ごろ活躍した。別号に晋阿、相応庵、傘車、豆花、堤堤堂。姓は鶴見ともかく（『日本人名事典』）。

初代一漁は初代団十郎とともに榎本其角の門人であった。ここでは息子の二代目一漁か。

(5)

**大黒や**

〔郡〕「大黒屋久左衛門。芝居町堺町の料理屋」

〔伊柿〕「後に出する大久力」

大黒屋久左衛門は茸屋町の芝居茶屋の代表者（伊原青々園著「外形の変遷とおよび法令」『日本演劇史』第二編、近世文芸研究叢書第二期、芸能二、歌舞伎二、クレス出版、一九九六年）。

**【解説】**

一月二十七日、二代目団十郎は市村座元八代目市村羽左衛門、大名隠居松浦篤信、俳人鶴海一漁らと両国橋の寄合茶屋菱屋小左衛門で宴会を催した。菱屋小左衛門は柳澤吉保ら和歌を嗜む幕府関係者が訪れた茶屋で、松浦篤信は俳諧に親しんでいたため、この茶屋を訪れたのだろう。

同茶屋は享保二十年に開業する河原崎座控櫓臣申請に関与するなど（享保十九年十月九日○、享保二十年二月二十六日●）、歌舞伎界に深い関わりがあった。

一月十一日、篤信は二代目団十郎や一漁らとともに芝居茶屋大黒屋を訪れた。このとき二代目団十郎は酒に酔い、下駄を踏み違えたという思い出話をして皆が笑った。十月二十三日には、市村座幹部の役人と役者、鶴海一漁など江戸の俳人が松浦篤信の屋敷に招かれ、紅葉見を行った（○）。

「大黒や」は「大黒屋久左衛門」〈郡〉か。大黒屋久左衛門は二代目団十郎の日記に頻出。十月二十三日に松浦大名屋敷で開かれた紅葉見会の準備も大黒屋久左衛門が行った。しかし、二代目団十郎は大黒屋久左衛門を「大久」と記し、また堺町には芝居茶屋大黒屋十左衛門（元文五年三月二十一日●）もあった。